

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 7 月 28 日現在

機関番号：23703

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26503003

研究課題名(和文)戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学

研究課題名(英文)The Postwar Reception of Mass Media and Contemporary Art: A Cultural Analysis

研究代表者

松井 茂(Matsui, Shigeru)

情報科学芸術大学院大学・メディア表現研究科・准教授

研究者番号：80537077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：磯崎新、今野勉、高松次郎を事例に、第2次世界大戦後の日本の現代芸術を、マス・メディア(放送文化と出版文化)を分母とした文化現象として捉え直した。特にテレビ映像が、現代芸術に与えた影響を検証し、これを明らかにすることができた。

論文の発表のみならず、展覧会やテレビ番組の制作を通じて、文化学の研究手法、公開手法を新たに提起することができたと考えている。特に、高松次郎が出演するテレビ番組の発見、そのテレビ番組を映像資料として展覧会で展示し、新たにドキュメンタリー番組を制作し、映像資料を基にした展覧会を実現した循環に、現代性があったと考えている。

研究成果の概要(英文)： Using the examples of Arata ISOZAKI, Tsutomu KONNO, and Jiro TAKAMATSU, I reinterpret Japanese Contemporary art as a cultural phenomenon with mass media (i.e. broadcasting culture and publishing culture) as its common denominator. In particular, I was able to examine and clarify the influence of the television image on contemporary art.

I believe that I was able to present new research and publication methods for cultural studies through exhibitions and televisions programs as well as through papers and presentations. I feel that of particular significance was the finding of a television program in which Jiro TAKAMATSU appeared, the presentation of visual material from this program in an exhibition, and the creation of a new documentary program. This cycle led to the realization of an exhibition based on these visual materials.

研究分野：文化学

キーワード：マス・メディア 現代芸術 / 現代美術 テレビ

### 1. 研究開始当初の背景

21世紀、家庭のテレビはもちろんのこと、PCや様々なディスプレイが日常に溢れ、都市空間においては、従来の広告看板が、デジタル・サイネージに変わった。メディア環境の変化は、静止画よりも動画を日常化し、映像リテラシーを培ってきたテレビ・メディアにおけるメディア表現の検証が近年注目されてきた。こうした状況同様に、近年の現代芸術も映像表現を主流なメディアとしつつある。美術館では、絵画を展示するホワイト・キューブが、映像を上映するためのブラック・キューブとして使用される機会が増している。こうした潮流は世界的なもので、これを転換期として追認するターミノロジーのひとつとして、日本では「メディア芸術」という語が登場したといえるだろう。この登場は、文化現象として映像表現が日常化したことに加え、従来の芸術とはコンテクストを異にしたマス・メディアを創造力の基盤とする新たな芸術形式の登場を意味しているだろう。このことは、新たな芸術諸理論の形成と、テレビに象徴される放送文化に関する分析が要請されている。

### 2. 研究の目的

第2次世界大戦後の日本の視覚文化を、マス・メディア（放送文化と出版文化）を分母とした文化現象として捉え、特にテレビ映像が現代芸術の映像表現に与えた影響を文化的に検証することを目的とする。メディア史を踏まえ、マス・メディアのイメージの流通を問い直し、現代芸術の展開を映像表現のコンテクストから再編することを意図している。テレビ映像の研究を基盤に、

(1) 放送文化におけるテレビ映像表現の展開を検証。

(2) 「マス・メディア」「マス・コミュニケーション」概念の受容が、芸術諸理論へ及ぼした影響を検証する。

(3) テレビ映像表現の展開が、1960年代以降の現代芸術の表現手法と主題へ及ぼした影響を検証する。

### 3. 研究の方法

研究体制は、研究代表者と研究分担者から構成し、各々がこれまで続けてきた研究をベースに、以下の3つの主題に着目して研究を進める。

(1) 放送文化におけるテレビ映像表現

(2) マス・メディアと芸術諸理論

(3) 現代芸術の表現手法とマス・メディア。

半年毎に研究情報の共有をはかり、2年目には、隣接領域の研究者も招きつつ、ワークショップを実施し、3年目には、総括としてシンポジウムを開催した。これらの研究成果は、編集し、紀要等で随時公開をはかることを心がけた。従来の文献研究に加え、放送関係者、芸術家を対象に、オーラル・ヒストリー等の手法を用い、具体的な事例研究を外

に公開し、開かれた議論に傾注した。

### 4. 研究成果

[2014年度]

研究代表者は、以前からマス・メディアと現代芸術をめぐる研究課題の対象としてきた、建築家、都市デザイナー、思想家の磯崎新(1931～)と、テレビ・ディレクター今野勉(1936～)に関する研究を実施した。

磯崎に関しては、「磯崎新 12×5=60」(ワタリウム美術館、2014年8月31日～2015年1月12日)の展示監修を担当し、これまでの研究を承けて、「建築外的思考」をテーマとして構成にあたった。展覧会会期中には、本展の実施に際して浮上した観点を検証する意図から、以下のテーマに関して、当事者、研究者と公開のディスカッションを実施した。

「ノーブルコーラン・オアシスをめぐって」原田大三郎(映像作家)

「著作をめぐって」日笠直彦(建築家)

「住宅と栖をめぐって」植田実(編集者)

「トリーハウスとスケッチをめぐって」田中純(東京大学)

「ノーノと秋吉台をめぐって」細川俊夫(作曲家)

「パラディウムをめぐって」渡辺真理(法政大学/設計組織ADH)

「1960年代をめぐって」伊村靖子(国立新美術館)

「高松次郎をめぐって」神山亮子(府中市美術館)

「年表(戦後日本美術)をめぐって」中ザワヒデキ(美術家)

「大文字の建築をめぐって」岡崎乾二郎(アーティスト)

今野に関しては、研究成果の一環として、「ディスカバー、ディスカバー・ジャパン「遠く」へ行きたい」展(東京ステーションギャラリー、2014年9月13日～11月9日)に協力し、展覧会との共催で、シンポジウム「DISCOVER JAPAN 2014 流通するイメージとメディアの中の風景」を実施した。今野の他、足立正生(映画監督)、吉見俊哉(東京大学)、小原真史(映像作家)、成相肇(東京ステーションギャラリー)が登場した。そして、今年度の研究の成果として、マス・メディアと現代芸術の関係性を主題とした論文、「今野勉 根源的なテレビ表現をするレジスタンス」(『放送研究と調査』)を執筆した。

この他、研究代表者は、TBSの秋山浩之ディレクターとの調査研究を通じて、インタビュー構成による美術ドキュメンタリー番組『アトリエを訪ねて』(TBS、1973～76年)の研究に着手した。

研究分担者の伊村靖子は、これまでの研究を承けて、「コレクションを中心とした小企画: 美術と印刷物 1960-70年代を中心に」展(東京国立近代美術館、2014年6月7日11月3日)共同企画に参加した。

研究分担者の中西博之は、美術家、高松次郎に関する調査研究を実施した。

[ 2015 年度 ]

研究代表者は、前年度に続いて、マス・メディアと現代芸術をめぐる研究課題の対象としてきた、建築家、都市デザイナー、思想家の磯崎新（1931～）と、テレビ・ディレクター今野勉（1936～）に加え、美術家の高松次郎（1936～98）に関する研究を実施した。

研究分担者の中西博之は、昨年度までの調査研究も含む「高松次郎 制作の軌跡」展（国立国際美術館、2015年4月7日～7月5日）を実施した。また、研究代表者と中西は、昨年度より研究に着手した美術ドキュメンタリー番組『アトリエを訪ねて』に高松の出演する回（1974年4月27日放送）を発見。同番組の再放送を含む、「ニュースの視点 いま、なぜ、高松次郎か？」（TBS ニュースバード、2015年4月22日放送）を制作。マス・メディアに残された現代美術の映像資料の調査、活用を実施し、テレビ局と美術館と大学間における、アーカイバル・リサーチの循環を模索する機会を提示した。

そして、今年度の研究の成果として、マス・メディアと現代芸術の関係性を主題とした磯崎に関する論文、「「かいわい」に「まればと」が出現するまで 「お祭り広場」1970年」を執筆した。

また、本科研2年目であることから、隣接領域の研究者も招きつつ、ワークショップを「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」を実施した。研究代表者、分担者の他、田坂博子（東京都写真美術館学芸員）、川崎弘二（電子音楽研究）、馬定延（東京藝術大学、公益財団法人日韓文化交流基金招聘フェロー）、赤羽亨（情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 准教授）、ケン・ヨシダ（カリフォルニア大学マーセド校准教授）、原久子（大阪電気通信大学総合情報学部教授）、金山智子（情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 教授）、飯田豊（立命館大学産業社会学部准教授）が登壇した。

[ 2016 年度 ]

最終年度は、マス・メディアと現代芸術をめぐる研究課題によって得られた知見の収集と公開を目的に、シンポジウム「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」（キャンパスプラザ京都、2016年11月12日）を実施した。研究代表者、分担者の他、飯田豊（立命館大学産業社会学部准教授）、川崎弘二（電子音楽研究）、原久子（大阪電気通信大学総合情報学部教授）、赤羽亨（IAMAS 准教授）が登壇した。このシンポジウムの口頭発表をもとに、研究成果の特集を『情報科学芸術大学院大学紀要』に掲載した。

研究代表者は、これまでの調査研究を踏まえ、「あゝ新宿 スペクタクルとしての都市」

展（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2016年5月28日～8月7日）展のキュレーションに参加。

研究代表者と研究分担者の中西は、美術ドキュメンタリー番組『アトリエを訪ねて』の高松の放送回を基にした「高松次郎：アトリエを訪ねて」展（Yumiko Chiba Associates viewing room shinjuku、2016年6月16日～7月9日）に協力。本展の開催に合わせ、中西による研究冊子『高松次郎：アトリエを訪ねて』を刊行した。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計17件）

松井茂、戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学 高松次郎の場合、情報科学芸術大学院大学紀要、第8巻、2017、pp.102-111

伊村靖子、汎用技術と表現 60年代美術において「デザイン＝設計」が意味するもの、情報科学芸術大学院大学紀要、第8巻、2017、pp.142-147

松井茂、「免疫」としてのアンビルド 東京都新都庁舎計画 1985年、あゝ新宿 スペクタクルとしての都市、早稲田大学演劇博物館、pp.118-125、2016

松井茂、磯崎新 TOKYO1960-1970STAGE 書を捨てよ、町へ出よう、あゝ新宿 スペクタクルとしての都市、早稲田大学演劇博物館、pp.126-135、2016

松井茂、作者の指、Masaki Fujihata Anarchive、vol.6、2016、pp.23-26

松井茂、西尾美也の場合 再読・民族誌家としてのアーティスト、情報科学芸術大学院大学紀要、第7巻、2016、pp.105-112

黒瀬陽平 + 松井茂 + 桂英史、批判的芸術と主体をめぐる 端末市民が演じる役割と知覚、loop 映像メディア学、第6巻、2016、pp.134-169

伊村靖子、1960年代日本美術における「デザイン」の意義について 「色彩と空間」展（1966年）がもたらした議論を中心に、NACT Review 国立新美術館研究紀要、査読有、第2巻、2015、pp.24-35

松井茂、「かいわい」に「まればと」が出現するまで 「お祭り広場」1970年、at プラス、第25巻、2015、pp.112-124

松井茂、流通するイメージとメディアの中の

風景、AMC JOURNAL、第1巻、2015、pp.188-209

伊村靖子、1960年代における「テレビ」をめぐる言説と芸術表現 今野勉所蔵資料を手がかりに、AMC JOURNAL、第1巻、2015、pp.116-127

松井茂、今野勉 根源的なテレビ表現をするレジスタンス、放送研究と調査、査読有、765巻、2015、pp.2-25

松井茂、「場の記録」をめくって、ドキュメンタリーマガジン neoneo、第4巻、2014、pp.60-63

今野勉、松井茂、成相肇、流通するイメージとメディアの中の風景(今野勉インタビュー)、ディスカバー、ディスカバー・ジャパン「遠く」へ行きたい、2014、pp.166-177

伊村靖子、色彩と空間展から大阪万博まで 60年代美術とデザインの接地面、美術フォーラム21、第30巻、2014、pp.72-77

伊村靖子、展覧会と美術資料 Materializing Six Years: Lucy R. Lippard and the Emergence of Conceptual Art を例に、NACT Review 国立新美術館紀要、創刊号、2014、pp.146-150

谷口英理、伊村靖子、長名大地、美術資料をめぐる回想 松本武氏に聞く NACT Review 国立新美術館紀要、創刊号、2014、pp.152-182

〔学会発表〕(計13件)

松井茂、木島則夫ハプニングショー(NTV)について、「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」、2016年11月12日、キャンパスプラザ京都

飯田豊、メディア・イベント概念の理論的再構築に向けて、「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」、2016年11月12日、キャンパスプラザ京都

川崎弘二、NHKアーカイブスの利用によるNHK電子音楽スタジオで制作された電子音楽作品の調査、「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」、2016年11月12日、キャンパスプラザ京都

中西博之、TBSの美術番組『アトリエを訪ねて』の高松次郎、「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」、2016年11月12日、キャンパスプラザ京都

原久子、芸術文化情報に関する発信、受容とその変遷について、「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」、2016年11月12日、キャンパスプラザ京都

伊村靖子、汎用技術と表現—美術において「デザイン=設計」が意味するもの、「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」、2016年11月12日、キャンパスプラザ京都

赤羽亨、3Dスキャニング技術を用いたインタラクティブアートの時空間アーカイブ、「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」、2016年11月12日、キャンパスプラザ京都

山下洋輔、田原総一朗、五箇公貴、宮沢章夫、松井茂、岡室美奈子、シンポジウム「新宿1968 69 ドキュメンタリー/ハプニング/ジャズ」、2016年7月8日、早稲田大学大隈記念大講堂

松井茂、中西博之、高松次郎:アトリエを訪ねて、2016年6月25日、Yumiko Chiba Associates

松井茂、IAMASメディア表現アーカイブ/プロジェクトについて、文化庁平成27年度メディア芸術連携促進事業 タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復/保存に関するモデル事業 京都市立芸術大学芸術資源研究センターワークショップ、2016年2月14日、京都市立芸術大学

松井茂、「庭」と「公共性」テレコミュニケーションをめくって、恵比寿映像祭、2016年2月12日、日仏会館

伊村靖子、1960年代をめくって、磯崎新 12×5=60、2014年11月14日、ワタリウム美術館

伊村靖子、60年代デザイン運動と東京オリンピック、意匠学会、2014年7月26日、お茶の水女子大学

〔図書〕(計3件)

中西博之、高松次郎:アトリエを訪ねて、Yumiko Chiba Associates、2016、24

中西博之、Jiro Takamatsu CATALOGUE 2015、Stephen Friedman Gallery、2015、22

榎木野衣、五十嵐太郎、蔵屋美香、黒瀬陽平、松井茂ほか、キュレーションの現在 アートが「世界」を問い直す、フィルムアート社、2015、230

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

「磯崎新 12×5=60」展

<http://www.watarium.co.jp/exhibition/1408isozaki/index2.html>

「ディスカバー、ディスカバー・ジャパン  
「遠く」へ行きたい」展

[http://www.ejrcf.or.jp/gallery/exhibition/201409\\_DISCOVER\\_JAPAN.html](http://www.ejrcf.or.jp/gallery/exhibition/201409_DISCOVER_JAPAN.html)

「コレクションを中心とした小企画：美術  
と印刷物 1960-70年代を中心に」展

[http://archive.momat.go.jp/Honkan/Art\\_and\\_Printed\\_Matter.html](http://archive.momat.go.jp/Honkan/Art_and_Printed_Matter.html)

「高松次郎 制作の軌跡」

[http://www.nmao.go.jp/exhibition/2015/id\\_0323100431.html](http://www.nmao.go.jp/exhibition/2015/id_0323100431.html)

「ニュースの視点 いま、なぜ、高松次郎  
か？」

[https://www.youtube.com/watch?v=XsI-Bjd6\\_Hk&t=1881s](https://www.youtube.com/watch?v=XsI-Bjd6_Hk&t=1881s)

「あゝ新宿 スペクタクルとしての都市」  
展

<http://www.waseda.jp/enpaku/ex/4395/>

「あゝ新宿 スペクタクルとしての都市」展  
ギャラリートーク

<http://www.waseda.jp/enpaku/ex/4521/>

「新宿 1968 69 ドキュメンタリー/ハプ  
ニング/ジャズ」

<http://www.waseda.jp/enpaku/ex/4462/>

「高松次郎:アトリエを訪ねて」展

<http://www.ycassociates.co.jp/jp/information/jiro-takamatsu-atorie-wo-tazunete/>

『情報科学芸術大学院大学紀要』vol.8

<http://www.iamas.ac.jp/20578>

6. 研究組織

(1)研究代表者

松井茂 (MATSUI Shigeru)

情報科学芸術大学院大学・メディア表現研究

科・准教授

研究者番号：80537077

(2)研究分担者

中西博之 (NAKANISHI Hiroyuki)

国立国際美術館・学芸課・主任研究員

研究者番号：20231722

伊村靖子 (IMURA Yasuko)

情報科学芸術大学院大学・メディア表現研究

科・講師

研究者番号：60647931